

Edward Göbbel: *Extraposition from NP in English -Explorations at the Syntax-Phonology Interface*

Boston/Berlin: De Gruyter Mouton, 2020. X + 368pp.

山村崇斗

1. 本書の目的と理論的枠組み

本書は、(1) や (2) のような名詞句からの外置 (Extraction from NP: 以下 ExNP) が、音韻部門での評価を通じて最適な韻律構造 (prosodic structure) として認められた結果であることを最適性理論 (Optional Theory: 以下 OT) に基づいて論じるものである。主に、(1) のように外置要素が強勢をもつ構成素をまたぐ場合と、(2) のように強勢をもたない構成素をまたぐ場合とに大きく二分され、両者については、4章で詳しく議論されている。

- (1) a. You'll find a review of Túrner **in your ín-tray**.
 b. You'll find a review **in your ín-tray** of Túrner.
 (Göbbel (2020: 189); emphases mine)
- (2) a. A mán from Índia **walked in today**.
 b. A mán **walked in today** from Índia.
 (ibid.; emphases mine)

5章は、非焦点PPや軽いPPの外置について議論しているが、紙面の都合上、事例の列挙は割愛する。著者の分析の中核である4章及び5章に先立ち、2章ではExNPの統語分析に関する先行研究をまとめながら問題点を挙げ、本書における分析の土台となる仮定を打ち立てている。その要点は、(3) のようにまとめられる。

- (3) a. End-based Theoryに基づき、統語構造と韻律構造の対応関係を仮定する (Selkirk (1986), Truckenbrodt (1999))。
- b. 統語計算はChomsky (2000) 以降のフェイズ理論に従う。
- c. Spell-Outにより、統語表示からPF表示が構築される。
- d. PF表示はOTの方法論に従って、韻律構造へと写像される。

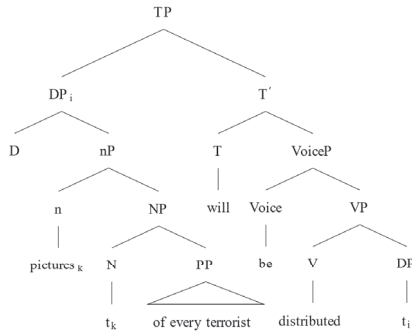
3章は、この仮定に基づく言語モデルを使って、統語構造から韻律構造への処理がどのように実行されるのかを主に重名詞句転移を引き合いに出して論じている。

OTの枠組みに従って、PF表示を入力として受け取った生成部門 (generator) が、そこから可能な韻律構造の候補を列挙し、評価部門 (evaluator) が当該の言語あるいは構文に関する制約群に照らして、優先度の高い制約から順に候補を評価する。その結果、最も違反の少ないものが最適な (実際の言語使用の場面で観測される音調と一致する) 韻律構造として選ばれる。次節では、(1) のような外置要素が強勢をもつ構成素をまたぐ場合の具体例を交え、本書の提案を概観する。

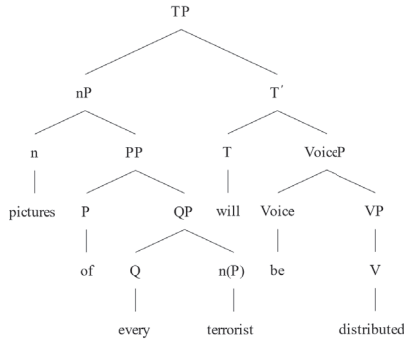
2. 前置詞句の主語名詞句からの外置

(4a) のExNPは、まずSpell-Out後の統語構造である(4b)から、(5)の語彙範疇条件に従い音形をもつ語彙範疇だけを使って、(4c)のようなPF表示が構築される。前置詞句of every terroristに対してPF移動が適用されると、(4d)のようなPF表示ができる。

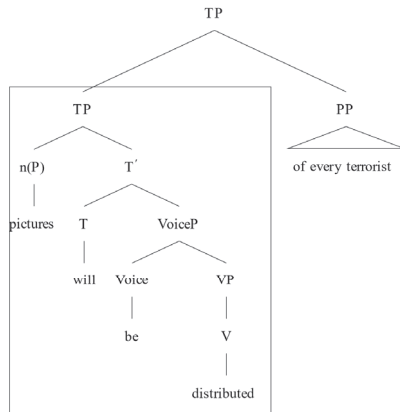
- (4) a. Pictures will be distributed of every terrorist.
 b.



c.



d.



(cf. Göbbel (2020: 202–204))

- (5) **Lexical Category Condition:** Constraints relating syntactic and prosodic categories apply to lexical syntactic elements and their projections, but not to functional elements and their projections, or to empty syntactic elements and their projections. (cf. Göbbel (2020: 125))

(4c, d) の PF 表示から韻律構造の候補が生成され、それが制約群の評価対象となる。ここで関係する制約は以下の3つである。

- (6) ALIGN-XP R (XP, R; PPh, R)
The right edge of any XP in syntactic structure must be aligned with the right edge of a phonological phrase in prosodic structure. (ibid.: 123)
- (7) PH_[ASE]=PPH
a. A Spell-Out Domain corresponds to a phonological phrase, or
b. Lexical terminals spelled out on a syntactic cycle form a phonological phrase if they have phrasal stress. (ibid.: 179)
- (8) MINBIN (PPH): A phonological phrase contains at least two prosodic words. (ibid.)

以下の2つの表は、4つの韻律構造の候補を、(6)-(8)の制約によって評価した結果である。制約は優先度の高い順に左から右へと並んでいる。MINBINは、最も優先度が低く、ALIGN-XPとPH=PPHの優先度は同じで、どちらを優先してもよい。表1ではALIGN-XPが、表2ではPH=PPHが優先されている。それぞれ最適候補が異なるが、ExNPの随意性が、このように現れる。表中の丸括弧は音韻句 (phonological phrase) の境界を表す。“*”は、制約に違反する度に付く。評価が終了したものには“!”が付く、以降の欄が網掛けで表現される。最適候補として残った韻律構造には“~~☒~~”が付く。

表1 Optional extraposition from subject 1 (cf. Göbbel (2020: 205))

pictures of every terrorist will be distributed	Align-XP	Ph = PPh	MinBin
(pictures of every terrorist will be distributed) a.	*!*		
☞ (pictures of every terrorist) (will be distributed) b.		*	*
(pictures will be distributed) (of every terrorist) c.	*!		*
(pictures) (will be distributed) (of every terrorist) d.	*	**!*	

表2 Optional extraposition from subject 2 (cf. Göbbel (2020: 205))

pictures of every terrorist will be distributed	Ph = PPh	Align-XP	MinBin
(pictures of every terrorist will be distributed) a.		**!	
(pictures of every terrorist) (will be distributed) b.	*!		*
☞ (pictures will be distributed) (of every terrorist) c.		*	*
(pictures) (will be distributed) (of every terrorist) d.	*!		***

主語 *pictures of every terrorist* は、2つの nP (*pictures of every terrorist* と *terrorist*) で構成されているので、ALIGN-XP は *terrorist* のすぐ右側で音韻句が区切られることを2回要求している。表1で、文全体を音韻句として解釈した候補 a は、ALIGN-XP の要求に2回違反し、候補 c は、ALIGN-XP が *pictures* の直後で1回違反している。一方、候補 b, d は ALIGN-XP に違反がないため、これらが PH=PPH の評価対象となる。PH=PPH は、文全体で1つの音韻句を成すことを求めている。これは、フェイズ理論に従って、受動文の vP はフェイズを成さないからであるが、候補 b, d はどちらも PH=PPH に違反しており、優劣が決まらないので、最終決定は次の MINBIN の評価まで持ち越される。MINBIN は、1つの音韻句が2つ以上の韻律語 (prosodic word) をもつことを要求する。(5) の語彙範疇条件に従うので、候補 b の音韻句 *will be distributed* では、語彙動詞 *distributed* が唯一の韻律語であるため、1回の MINBIN 違反となる。候補 d では、3つの音韻句内に韻律語になれる語彙範疇がひとつずつしか含まれていないので、3回の MINBIN 違反になり、結果として、最も違反が少ない候補 b が最適候補となる。PH=PPH が優先された表2では、同じ手順を踏むと、EXNP のある候補 c が最適候補である。

本節でみた事例は最も単純なもので、本書ではこれ以外にも様々な ExNP について、例えば、外項主語からの外置ができないこと、外置要素が焦点解釈をもつ事例、(2) のような強勢をもたない構成素をまたぐ事例などを取り扱い、考慮すべき制約の種類を追加しながら、そして、その序列を吟味しながら、同様の手順で評価し最適な韻律構造を理論的に導き出せるかを検証している。

3. 評価

本書の理解には、生成統語論、最適性理論、音韻論の知識が必要だが、1章ではフェイズ理論と最適性理論を概観し、3章の序盤では韻律構造などの音韻論の基礎知識のために紙面を割くなど、どの立場からでも読みやすくする工夫がみられる。提示された多くの表に関して、どの韻律構造がどの制約に何回違反しているのかの説明の分量が不均一で、難解な箇所も少なくないが、全体として理路整然で、主張点も明瞭である。

本書で利用されるデータの大部分は、著者による実験で収集した録音データで、議論の要所で音調曲線も提示されている。音調曲線の波形に合致する韻律構造を導き出せる仕組みのために、制約を立てたり、その優先度の序列を上下させているが、特に5章で扱われる事例では、著者も指摘している通り、話者間でも容認度の違いがみられるものもあるらしく、そのような場合には、必要とする制約の種類や優先度の序列が一意に定まらず、評価のための制約体系が細分化され、複雑になっていく。現象が周延的であるほど同様のことが予想され、その時に自然発話での音調を予測可能な仕組みに収束させられるのかという疑問を感じるが、これは最適性理論自体の個性であって、著者の分析そのものの問題ではないのかもしれない。

音韻論の研究に最適性理論が最適であるか否かの評価はできないが、抽象的で理論的実在である統語表示が、実際に観測可能な音声としてどのような具現のされ方をするのかという問題意識の下で取り組まれている研究の重要な成果だといえる。

* 本書を書評するに当り、次の3人の方々との勉強会に大変助けられました。岩崎宏之氏（宇都宮大学）、本多正敏氏（宮崎大学）、中村直樹氏（筑波大学大学院）に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays in Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. By Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIP Press, Cambridge, MA.
- Selkirk, Elisabeth (1986) “On Derived Domains in Sentence Phonology,” *Phonology Yearbook* 3, 371-405.
- Truckenbrodt, Hubert (1999) “On the Relation between Syntactic Phrases and Phonological Phrases,” *Linguistic Inquiry* 30(2), 219-255.